

## 天皇の巡幸を契機とする埼玉県師範学校に関わる石碑について（その一）

### ―「行在所記念之碑」と鳳翔閣―

薄井俊二 埼玉大学教育学部言語文化講座国語分野

キーワード：埼玉県師範学校、埼玉県女子師範学校、行在所記念之碑、鳳翔閣、天皇巡幸、明治天皇

#### 一 はじめに

埼玉大学教育学部の前身である埼玉県師範学校に関連する二つの石碑「行在所記念之碑」「鳳翔記光碑」がある。いずれも天皇が埼玉へ巡幸した際に、埼玉県師範学校（以下「埼玉師範」と）埼玉県女子師範学校（以下「埼玉女師」）に関わり、それを光栄だとして、記念して作られたものである。碑文としての文学的価値もない、ありふれたものではあるが、当時の現場レベルでの学校や教育の在り方を示す資料として、それなりの価値はあるものと考えられる。また碑文は、「行在所記念之碑」は既に何度か活字化されているものの誤写が多く、「鳳翔記光碑」については活字化されたものは管見に及ぶ限りない。その点でも、ここで紹介する意味はあるものと考えられる。

本稿は「行在所記念之碑」について、「翻刻」「訳注」を施し、建碑の経緯や背景について私見を述べるものである<sup>(1)</sup>。

#### 二 概要

明治十一年の東北巡幸において、天皇の一日目の宿泊地が浦和であり、その宿としたのが、新築まもない埼玉師範の新校舎であった。本石碑は、そのことを明治四〇年になって、顕彰したものである。

題字が石碑の表面に、漢文の碑文が背面に彫られている。嘉津山清によれば、石碑は「高さ三九〇cm、幅一五六cm、厚さ二四cm、額縦二一五cm、横九二cm」、材質は「仙台石」である<sup>(2)</sup>。現在この碑は、さいたま市浦和区高砂の埼玉会館広場の東側に立つ。

図1 行在所記念之碑表面、左側は「明治天皇史跡指定碑」



図2 行在所記念之碑背面上部



図3 明治四〇年刊行「みくるまの跡」掲載の写真と拓本



図4 女子師範門前の石碑（「大正十一年三月 卒業記念写真帳」

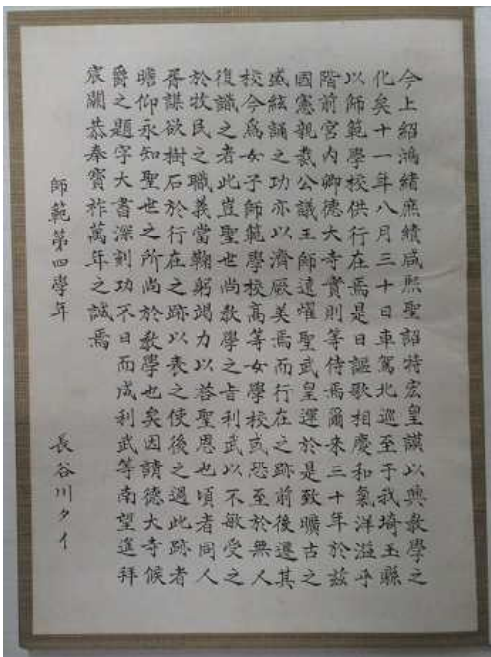


埼玉縣女子師範学校」)

図5 県立図書館前の石碑（「埼玉県名勝史跡写真帳」）



図6 長谷川タイ臨書（明治四三年卒業作品）



### 三 本文翻刻

#### 〔表面〕

行在所記念之碑

#### 〔背面〕

今上紹□鴻緒庶績咸熙□聖詔特宏□皇謨以興教學之化矣十一年八月三十日□車駕北巡至于我埼玉縣以師範學校供□行在焉是日謳歌相慶和氣洋溢乎階前宮內卿德大寺實則等侍焉爾來三十年於茲□國憲□親裁公議□王師遠燿□聖武□皇運於是致曠古之盛絃誦之功亦以濟厥美焉而□行在之跡前後遷其校今為女子師範學校高等女學校或恐至於無人復識之者此豈□聖世尚教學之旨乎利武以不敏受乏於牧民之職義當鞠躬竭力以荅□聖恩也頃者同人胥謀欲樹石於□行在之趾以表之使後之過此跡者瞻仰永知□聖世之尚於教學也矣因請德大寺侯爵之題字大書深刻功不日而成利武等南望遙拜□宸闕恭奉□寶祚萬年之誠焉

明治四十年天長節前五日

埼玉縣知事從四位勲三等大久保利武謹撰

從七位 市河三兼謹書

宮 龜年刻

\*文字は楷書体。聖・皇といった天子を想起させる文字については敬意をはらって前に空格を一字分設けている（十六箇所）。自分の本名である「利武」は、小字としている

#### 四 訳注

●本文（旧字体とし、一文ごとに改行する）

今上紹鴻緒、庶績咸熙、聖詔特宏皇謨、以興教學之化矣。

十一年八月三十日、車駕北巡至于我埼玉縣。

以師範學校供行在焉。

是日謳歌相慶、和氣洋溢乎階前。

宮内卿德大寺實則等侍焉。

爾來三十年於茲、國憲親裁公議、王師遠燿聖武。

皇運於是致曠古之盛、

絃誦之功、亦以濟厥美焉。

而行在之跡前後遷其校、今爲女子師範學校高等女學校。

或恐、至於無人復識之者。

此豈聖世尚教學之旨乎。

利武以不敏受乏於牧民之職、義當鞠躬竭力以答聖恩也。

頃者、同人胥謀、欲樹石於行在之趾、以表之、使後之過此跡者、

瞻仰永知聖世之所尚於教學也矣。

因請德大寺侯爵之題字大書。

深刻功不日而成。

利武等南望遙拜宸闕、恭奉寶祚萬年之誠焉。

明治四十年天長節前五日

埼玉縣知事從四位勲三等大久保利武 謹撰

從七位市河三兼謹書

宮龜年刻

#### ●訓訳

今上 鴻緒を紹<sup>つ</sup>ぎ、庶績 咸熙<sup>みなおこ</sup>り、聖詔 特に皇謨<sup>ひろ</sup>を宏め、以て教學の化を興す。

十一年八月三十日、車駕 北巡して我が埼玉縣に至る。

師範學校を以て行在に供す。

是の日 謳歌相慶し、和氣階前に洋溢す。

宮内卿德大寺實則等、侍る。

爾來 茲<sup>こゝ</sup>に三十年、國憲 公議に親裁され、王師遠く聖武を燿<sup>かがや</sup>かす。

皇運ここにおいて、曠古の盛を致す。

絃誦の功も、亦た以て厥<sup>そ</sup>の美を濟<sup>な</sup>す。

而るに行在の跡 前後其の校を遷り、今は女子師範學校高等女學校たり。

或ひは恐る、人の復た之を識る者無きに至るを。

此れ豈に聖世の教學を尚ぶの旨ならんや。

利武 不敏を以て牧民の職を受乏す、義として當に鞠躬して力を

竭くし以て聖恩に答ふべきなり。

頃者<sup>このころ</sup>、同人胥<sup>とも</sup>に謀り、石を行在の趾<sup>た</sup>に樹て、以て之を表し、後

の此の跡を過ぐる者をして、聖世の尚ぶ所の教學におけるを瞻仰

永知せしめんと欲す。

因りて德大寺侯爵に之が題字の大書を請ふ。

深刻の功 日ならずして成る。

利武等南に望みて遙かに宸闕を拜し、恭しく寶祚萬年の誠を奉ず。

明治四十年天長節前五日

埼玉縣知事 從四位勲三等 大久保利武 謹みて撰す

從七位 市河三兼 謹みて書す  
宮龜年 刻す

### ●語注

○今上 現在の天皇。ここでは明治天皇。後述。

○紹 受け継ぐ。「漢書」叙伝下に「漢紹堯運、以建帝業（漢堯の運を紹ぎ、以て帝業を建つ）」とある。

○鴻緒 大統、王業。「後漢書」順帝紀に「陛下踐祚、奉遵鴻緒（陛下踐祚し、鴻緒を奉遵せらる）」とある。

○庶績咸熙 もろもろの仕事を拡張し発展させる。「尚書」堯典に「允釐百工、庶績咸熙（允に百工を釐めて、庶績咸熙る）」とある。

○聖詔 天子の詔書の尊称。

○皇謨 天子のはかりごと、計画。

○行在 天子が行幸する際の仮の御所。

○謳歌 天子の徳政をほめたたえて歌うこと、またその歌。「孟子」万章上第五章に「謳歌者、不謳歌堯之子而謳歌舜（謳歌する者は、堯の子を謳歌せずして、舜を謳歌す）」とある。ここでは一般論ではなく、実際に天皇を褒める詩歌が埼玉の人々によって作られ、捧呈されていることを踏まえる。後掲注 29。

○慶 めでたいとして祝う、ことほぐ。

○和氣 和平之氣。温和で平和をもたらす気。「漢書」劉向伝に「和氣致祥、乖氣致異（和氣は祥を致し、乖氣は異を致す）」とある。

○洋溢 満ちあふれて広くゆきわたる。

○階前 きざはしの前。ここでは宮城の階段の前の意味で、「陛下」と同義だろう。行宮の天皇の前。

○宮内卿 宮内省長官。徳大寺実則は二代目。

○國憲 国家の法制。また憲法。ここでは大日本帝国憲法のことをいうか。明治二二（一八八九）年二月、發布。枢密院において、天皇親臨のもとに審議され、主権者たる天皇が定めて、国民に下し与えるというかたちで制定・發布された。

○親裁 天子が自ら裁決すること。

○公議 おおやけの議論。

○王師 天子の軍隊。「詩経」周頌・酌に「於鑠王師、遵養時晦、時純熙矣（於鑠なる王師、遵て時の晦を養れ、時れ純いに熙かん）」とある。

○聖武 智徳完全の威武。「尚書」伊訓に「惟我商王、布昭聖武、代虐以寛、兆民允懷（惟れ我が商王、聖武を布昭し、虐に代ふるに寛を以てし、兆民允に懷く）」とある。

○王師遠耀聖武 明治二八（一八九五）年終結の日清戦争と、同三八（一九〇五）年終結の日露戦争の「勝利」。また、同二八年の台湾併合や同三八年の韓国併合も含むだろう。これらはもちろん日本による植民地政策Ⅱ侵略であるのだが、形式上は台湾や朝鮮が、日本を慕い喜んでその傘下に入ったという形を取っている。

○皇運 皇帝・帝国の命運。史岑の「出師頌」（「文選」巻四七）に「皇運來授、萬寶増煥（皇運來り授けられ、萬寶煥きを増す）」とある。

○曠古 古をむなしくする。前例のない、空前絶後。

○絃誦 古代、「詩経」を教え学ぶのに、弦楽を伴うものを弦歌

といい、弦楽を伴わずに朗読するものを誦といった。あわせて弦誦で、詩経を教え学ぶこと。転じて、あまねく教え学ぶこと。ここでは、直接的には、明治二三（一八九〇）年の「教育ニ關スル勅語（教育勅語）」の發布を意識しているものと思われる。

○濟厥美 子孫がよく父祖の業を受け継いでさらなる善事をなすこと。「春秋左氏伝」文公一八年に「世濟其美、不隕其名（世々其の美を濟し、其の名を隕さず）」とある。

○利武 埼玉県知事大久保利武。後述。

○不敏 さとくない、愚か者。「論語」顔淵篇に「回、雖不敏、請事斯語矣（回、不敏なりと雖も、請ふ、斯の語を事とせん）」とある。

○受乏 承乏に同じ。乏はむなしい。承乏は、乏を承けるで、適任者がおらず空いている職位に仮につくこと。のちに官吏が自分の任官を謙遜するという。「春秋左氏伝」成公二年に「敢告不敏、攝官承乏（敢えて不敏を告ぐ、官に摂はり乏を承く）」とある。

○牧民之職 牧民官は、地方長官の称。ここでは県知事。

○義 道義上。

○鞠躬 「鞠躬盡瘁」の略語。恭しく慎み、心と体の力をつくしてつとめる。諸葛亮「後出師表」（「古文真宝」等）に「臣、鞠躬盡瘁、死而後已（臣、鞠躬尽瘁し、死して後已まん）」とある。

○竭力 力をつくす。尽力。「論語」学而に「事父母、能竭其力（父母に事へて、能く其の力を竭くす）」とある。

○聖恩 天子の恩寵。韓愈「潮州刺史謝上表」（「唐宋八家文」等）に「聖恩弘大、天地莫量（聖恩の弘大なること、天地も量る莫し）」とある。

○同人 同じ志の人。

○胥謀 胥は、相互に、ともに。與に通じる。與謀は、ともに謀る。「史記」項羽本紀に「（亞父）曰、唉、豎子不足與謀。（亞父曰く、唉、豎子は與に謀るに足らず）」とある。

○瞻仰 みあげる。仰ぎ慕う。「漢書」朱雲伝に「大臣者、國家之股肱、萬姓所瞻仰、明王所慎擇也（大臣なる者は、國家の股肱、万姓の瞻仰する所、明王の慎みて択ぶ所なり）」とある。

○功 仕事、事業。

○不日 「日ならず」。幾日も経たないうちに。「詩経」大雅靈台に「庶民攻之、不日成之（庶民之を攻め、日ならずして之を成す）」とある。

○宸闕 宮城の門の両側にある門闕。転じて、宮城。宸掖とも。宋蔡襄「賀文樞使啓」に「拜恩宸闕、正位樞廷（恩を宸闕に拜し、位を樞廷に正す）」とある。

○奉 両手でうやうやしくたてまつる。

○寶祚 天子の即位。皇位。又国運。

○天長節 天皇の誕生日で祝日。明治時代は、明治天皇の誕生日で九月二二日。

○前五日 九月一七日にあたる。

## ●人物

○今上 明治天皇。名は睦仁。幼名祐宮。孝明天皇の第二子。嘉永五（一八五二）年から明治四五（一九一二）年、在位一八六七年から。東北巡幸の一年は、二六歳であった。

○徳大寺實則 とくだいじさねのり。天保一〇（一八三九）年



から大正八（一九一九）年。右大臣徳大寺公純の長男。嘉永四（一八五一）年に侍従に任ぜられたのを皮切りに宮中の官を歴任し、明治四（一八七一）年に侍従長・宮内卿を兼任し、以後明治天皇の崩御に至るまで侍従長として側近に仕えた。

○大久保利武 おおくぼ としたけ。慶応元（一八六五）年から昭和一八（一九四三）年。大久保利通の三男。明治二〇（一八八七）年に第一高等中学校を卒業後、アメリカ合衆国等に留学。帰国後は、内務大臣秘書官・大分県知事等を歴任して、同三八（一九〇五）年に第三代埼玉県知事となる。四〇歳の若さであった。知事在任中の業績等は小山博也氏の論考<sup>（3）</sup>に詳しいが、教育の発展にも力を入れたことが注目される。この点は後述。

○市河三兼 いちかわさんけん。号は萬庵。天保九（一八三八）年から明治四〇（一九〇七）年。幕末三筆のひとりである市河米庵の子。洋式砲術を学び、鉄砲方となるが、のち養子に家督を譲り、書を生業とする。明治維新後政府に仕え、明治三（一八七〇）年にロンドンで印刷された、日本最初の紙幣の文字を担当した。同四〇年十一月一〇日に死去しており、行在所記念之碑建立が九月一七日であり、死の直前の作品ということになる。

○宮亀年 きゅうきねん。弘化二（一八四五）年から大正七（一九一八）年。本名は本宮為吉。碑銘彫刻師。「亀年」という名は、祖父である本宮勘兵衛が、天保年間に小田原城主大久保加賀守から賜ったものとされ、以降、石工として家を継ぐ者がこの名を名乗るようになった。為吉は「三代目宮亀年」である。明治五（一八七二）年に東京芝で開業。多くの石碑を手がけた。彼の伝記と作品については、前掲注2に詳しい。この碑を刻したのは六二歳、

円熟の時を迎えていた。姓の「宮」は、名字の本宮から一字を取り中国風にしたもの<sup>（4）</sup>。よって「みや」ではなく「きゅう」と漢音で音読みする。

#### ●口語訳

【明治天皇の即位と偉大な事績、特に教育を重視したこと】  
今上陛下は、日本の皇位という大いなる事業を継承され、もろもろの仕事を拡張、発展させられたが、詔勅により天子のはかりごとをひろめ、発揚され、とりわけ教育学問に関わる教化を振興された<sup>（5）</sup>。

【明治一一年の巡幸と師範学校への御幸】  
一一年八月三〇日、天皇のお車は、日本北部巡幸の途につかれ、まずわが埼玉県に至られた。

そこで我らは師範学校を行在所として提供申し上げた。  
この日、天子を褒め称える歌声が沸き起こり、天子をことほぎ、和平の気が行在所の陛下の御前に満ちあふれ、広く行き渡った。  
そして宮内卿の徳大寺實則卿らが、天子に侍りたてまつったのである。

【以来帝国の命運や教育学問が伸張したこと】  
それ以来、今に至るまで三〇年間に経ったが、この間、世界に冠たる大日本帝国憲法が、十分なおおやけの議論を尽くした上で天皇によって定められ、臣民にくだされた（日本国の内治の柱が確立したことを言う）。また正しい天子の軍隊は、清やロシア等の大国を打ち破って従え、台湾や朝鮮といった国々は皇国を慕ってその傘下に入ることを選んだ。

大日本帝国の命運はここにきて、かつてない空前絶後の隆盛をむかえたのである。

そして教育学問の功績としても、先祖の美德を受け継ぎ、りっぱに大成させたのである。

#### 【明治天皇御幸の跡の危機】

（このように天皇を戴いた日本国は、その恩愛によつて隆盛を極めていくのにもかかわらず）、わが埼玉県におけるありがたい行在所の跡は、その後学校の出入りがあり、今では埼玉県師範学校ではなく、埼玉県女子師範学校と埼玉高等女学校が入るに至っている。このように学校が入れ替わっていくことが続いたならば、ここがどんなに大切な場所であつたかについて、知る人がいなくなってしまうのではないか、と危ぶまれる次第である。

こうした事態が起こってしまうことは、教育学問を尚ぼうという、天子の御心の趣旨に沿うものと言えるだろうか。いや言えないだろう。

#### 【聖蹟に石碑を建てて顕彰すること】

不肖わたくし大久保利武は、愚か者であるにもかかわらず、適任者がいないという非常事態の中で、民を統治する知事の大役をかつただけでなくも拝命しました。臣民たるもの、義として、恭しく慎み、心と体の力を尽くしてつとめ、御任命くださいました、天子の篤い恩寵に報いるべきは当然のことであります。

そこで、このごろ、同志のものたちとはかり、石碑を行在所の跡に建て、それによつてこの地を表顕（はつきりと世の中に示す）し、後世のこの地を通り過ぎる人々に、「天子の御心が尚んでいらつしやつたのは教育学問に他ならなかつた」ことを仰ぎ見あげ

慕い、永遠に知らしめたいと思つたのであります。

#### 【建碑】

そこで先の巡幸にも随行された、この地にゆかりの深い徳大寺侯爵に大書の題字を請うたところでございます。

かくしてその題字を深く彫りつける功業は、幾日もない内に完成しました。

【結び】不肖利武等、南を望み、遙かに陛下のいます宮城を拝礼し、恭しく天子の位は千年万年につづくことを心から願うことを奉じたてまつる。

#### 【署名】

明治四〇年、天長節に先立つこと五日

埼玉縣知事 従四位勲三等 大久保利武 謹んで撰述する

従七位 市河三兼 謹んで書す

宮亀年 刻す

#### 五 解説

##### 五―一 碑文の内容と構成

全二三五文字からなる本文の概要は、次の通りである。

明治天皇が即位し、その治世において様々な仕事が開かれ発展してきたが、とりわけ教育の振興が重視されていた。

明治一年、東北巡幸の第一歩として浦和の師範学校を行在所とされ、民草の歓迎の歌声が沸き起こるなか、天子の恩沢が人々に行き渡つた。

以来三〇年たったが、天子のお仕事はさらに発展し、内政では



憲法の制定という大事が実現し、外交では諸外国が皇軍の軍門に下ったり、日本の傘下に入ることを喜んだり、日本の開闢以来の一大盛時に至った。教育の面でも教育勅語の発布など立派な成果をあげてきた。

ところが、日本国中がそうした天子の恩恵による繁栄を続ける中、本埼玉県においては、ありがたい聖蹟である行在所の跡が、学校の入替えにより、忘却されてしまう危険性が生じている。

そこで、不肖、わたくし大久保利武は、同志とかがたらい、聖蹟に石碑を建てることによって、この地を顕彰し、教育を重要視するということの天子の御心を伝えることが肝要であると考えてに至った。

そして徳大寺實則卿に題字を請い、石碑を完成させることができた。不肖利武は、遙か南の皇城を拝礼し、天子の御代が永遠に続くことを願い奉る、と結ぶ。

全体として、明治天皇の恩沢と成果を強調し、その中で、明治天皇の聖蹟である行在所跡を顕彰する必要性があるとして石碑を建てたのだとするのである。

## 五―二 明治十一年の巡幸と埼玉県師範学校(鳳翔閣)

次に建碑のもともとの淵源である明治十一年の巡幸と埼玉師範、鳳翔閣との関わりについて確認しておく。

### (一) 明治十一年の巡幸

明治維新となり、新しい日本の頂点に立つことになった天皇は、しばしば宮城から出て、全国を巡幸した。特に明治二〇(一八八

七)年までの二〇年間には、八回の大規模な巡幸が行われている。こうした巡幸は、天皇が新しく支配地域となったところを視察するとともに、地方の人々に天皇の姿を見せることによって、「王化」を行き渡らせ、天皇を推戴する意識を人々の中に生み出すことにあつた。「全国各地の民情を天皇が実地に視察するとともに、天皇をまだ見たこともない地方に住む人々に、新しい支配者を崇敬する習慣を根づかせようとする政府の意図」<sup>(6)</sup>に基づくものであつた。

こうした「新しい支配者の姿を見せて回る」というのは、神から人間になった「天皇」の姿を見せて回った「第二次大戦後の昭和天皇の巡幸」や、さかのぼれば、初めて中華世界に統一王朝を打ち立てた秦の始皇帝が、斉や楚といった中国東部を中心に巡幸した「巡狩」に通じるものである。

明治十一年の埼玉巡幸は、次の通り。

○八月三日

・北陸東海両道の巡幸の途につく(手段は馬車)。

・太政大臣三条実美に天皇巡幸中の庶政を撰するよう勅す。

・午前七時三〇分、仮皇居を出発。供奉するのは右大臣岩倉具視

以下約三〇〇人、警備の巡查等約四〇〇人。

・一〇時、板橋に着。埼玉県令白根多助奉迎。見送りの皇后等とはここでお別れ。

・戸田橋を渡って埼玉県に入り、蕨を過ぎて、午後二時三〇分、浦和に到着。行在所に入って泊。

○八月三十一日

・午前七時、行在所を出発し、埼玉県庁訪問。県令、県治に関する書類を奉呈。各課の執務を巡覧。

・熊谷裁判所浦和支庁訪問。訟廷を巡覧。

・県立学校訪問。師範学校・中学校・英学並びに医学校、及び師範学科附属小学校の授業を巡覧。各優等生に賞品料を賜与。

・勸業博物館訪問。各館を巡覧。陳列品を天覧。

・一〇時、行在所に還る。

・正午、浦和を發し、大宮を経て、官幣大社氷川神社参拝。

・午後二時、大宮出發。上尾を過ぎて、四時、桶川到着。

○九月一日

・午前八時、桶川行在所を發し、鴻巣、吹上を経て、午後二時、熊谷行在所に到着。諸物を天覧。埼玉県民より詠進した祝詩文和歌を奉呈、天覧を賜る。群馬県令楫取素彦奉迎。

○九月二日

・午前七時、熊谷行在所を出發。

八月三〇日に天皇が宿泊し行在所となった施設が、埼玉県師範学校の新校舎、いわゆる鳳翔閣であった。二階の講堂隣の北側の一室が便殿に充てられた。翌三十一日には、移転前、岸村にあった師範学校を含む県立学校を訪問し、授業を参観している。

授業参観の内容は、『百年史 埼玉大学教育学部』（一九七六）（以下「百年史」）に引く、「御臨幸奉迎順序」によれば、以下の如くである。

・師範学科二級の物理学、中等科上等四級の歴史学、英学科上等四級の理学（心理学）、医学科一級の生理学の授業を、それぞれ

七分参観。

・附属小学校六級の児童「小学読本」と「暗算」の授業を参観。

・「数学」「画学」「史学」「生理学」の四分野にわたる生徒の作品や成績を、四つの部屋を五分間で回って御覧。

参観時間は合計で四〇分間であった。

## （二）行在所鳳翔閣について

鳳翔閣については、三条実美が命名した、という説がある。

現在、さいたま市立浦和博物館の所蔵になっている「鳳翔閣」の豎額の裏面には次のように書かれているという（？）。

時ニ太政大臣三條實美公侍シテ近則ニ在リ本校ニ冠スルニ鳳翔閣ノ名ヲ以テシ渾灑シテ斯ノ光榮ヲ永遠ナラシム乃棖楯シテ講堂ニ掲ケ別ニ刻シテ楣間ニ懸ケ日夕仰ギ聖鑑ト為セリ……茲ニ改装シテ此豎額ヲ造リ背ニ記シテ由來ヲ明カニス

昭和八年五月二十七日

また、埼玉師範創立六十周年を記念して作成された小冊子「創立祝賀光榮の六十年」（埼玉県立熊谷図書館蔵）には「この光榮を記念する爲に太政大臣三條實美公は校に「鳳翔閣」の美稱を附し、方二尺五寸の大字に書して天恩を永遠に傳へしめた」と記す。これらでは、近侍していた三条実美が鳳翔閣という名をつけ、さらにその言葉を揮毫した書と額があるとする（書は現在埼玉大学所蔵）。

この説は戦前戦後を通じて、伝えられてきた。

新築の師範學校を以て行在所に充てさせ給ひ、階上の一室を便殿とせられ、供奉の三条實美は即ち本校に題して鳳翔閣の名を與へられた。

『埼玉県史』第七卷…昭和一四（一九三九）年

鳳翔閣の名は明治一一年八月三〇日、行在所として使用された折、太政大臣三条實美がこれを記念して命名したものである。

前野堯「鳳翔閣について」（手書き版）昭和四六（一九七一）

この建物はほぼ工をおえた八月三〇日、明治天皇の巡幸の行在所として使用を始められ、鳳翔閣とはその時随行した三条實美によつて命名されたことはよく知られている。

柳瀬忠「鳳翔閣について」『浦和』No.三八（一九七二）

旧埼玉師範學校は別名を鳳翔閣という。これは明治一一年の明治天皇北陸行幸の折同校が宿所となり、随行の太政大臣三条實美から鳳翔閣の名を受けたため。

「浦和市立郷土博物館」

埼玉県教育委員会『埼玉県明治建造物緊急調査報告書』

昭和五四（一九七九）年

ところが、高山清司「鳳翔閣について」<sup>(7)</sup>はこの点に疑問を呈する。高山説はほぼ妥当だと考えるので、若干の資料の補足などもしながら、高山説を紹介する。

高山は、まず、明治一一年の巡幸に、三条實美は随行したよう

には思われない、とする。その根拠は、「明治天皇紀」に「八月三十日……又太政大臣三条實美に勅して巡幸中の庶政を攝せしめ」とあることである。天皇が巡幸で宮城を留守にするため、太政大臣がその間、摂政の役割を担う。巡幸に随行することはない。そして「明治天皇紀」に記す供奉者の中に三条の名は見当たらない。

また高山は、三条の揮毫になる「鳳翔閣」の額は、天皇が行幸した八月三〇日に、すでに行在所に掲げられていたとする証言を紹介する。それは東京日日新聞（のちの毎日新聞）明治一一年八月二九日づけの岸田吟香の次の記事である<sup>(8)</sup>。（原文の変体仮名は通用字に改めた。傍線稿者（以下同））

頓て浦和の入口にて車を下り茶店に憩ひて見渡すに……折ふし傍らの床机に群れ居たる車ひく男どもが高聲にて罵り合ふを心とも無く耳を留むるに禁廷様のお通りはもはや近づきぬ凡そ今度の御道筋なる北陸東海兩道の宿宿その數いくつとは知らねど行在所の設けいみじきは此宿に勝るはあらじと云ふ不審しきかな此宿はしばしば通りて能く知れどさる美麗の家はあらず……振り返りていま聞く行在所とは那處なるやと尋ねしに車夫どもは……抑も當宿の行在所と定められしは辱なくも先頃より設立の企てありし師範學校にて……官員様はこの宿には然るべき家なし幸ひにこの學校を行在所とせばやと……日ならずして落成し今度の間に合ふことと成りぬ。……今ま聞きし學校を一見せんと左りへ折れて行くに果たして右の方に西洋風の石にて組み立てたる門あり周圍は二寸角ばかりの木の柵を結びペンキにて塗り校も二層の西洋風にて

宏壮目を驚かすばかりなり樓上の正面に鳳翔閣と彫りたる額を掲げたるは三條太政大臣の書なりと……樓下の入口の正面には縣令白根公の書せられし額あり。

ここで岸田は、天皇巡幸の数日前に、既に三条揮毫の額(図7)が、鳳翔閣の二階に掲げられていたという。

これらのことから考えて、随行した三条実美が行在所を見て鳳翔閣と名づけた、とするのは誤解であることが分かる。実際の巡幸のかなり以前に、三条に揮毫を依頼し、それを元に額を作成し、巡幸に間に合うように掲額したものであろう。

「鳳翔閣」の額の作成について、高山は、岸田も触れていた白根多助の「教化風行文光奎照」の額(図8)との類似性を推測している。こちらの額の碑文の撰は「明治十一年七月廿四日撰」とあり、その日時がはつきりしている。白根が撰文してから鳳翔閣への掲額までおよそ一ヶ月である。三条の場合も、おそらく七月下旬以前に依頼をして揮毫してもらったのであろう。

こうであれば、三条は実際の師範学校の建物を見ることなく「鳳翔閣」という書を揮毫したことになる。そうすると、三条がこの建物に鳳翔閣という名を与えた、ということも果たしてあったのだろうか、という疑問がわく。

高山は、「(鳳翔閣という)命名は、建物の全景が鳳の両翼を拡げた様に似ていることによるものであろう」とする説(9)にも疑問を呈し、「鳳翔閣と言う名もこの建物の形などともあまり関係がなかったかもしれない」(10)とし、「この鳳翔閣という名の建物は同じく明治天皇の遺跡として愛知県武豊町にかつて存在して

いた」とし、資料として、武豊町教育委員会「―文化財めぐり―武豊」昭和五二年三月、をあげている。今この資料を入手することはできていないが、より詳細な資料と現地調査により、この「もう一つの鳳翔閣」について述べてみる。

図7 三条実美書額



図8 白根多助書額



### (三)もうひとつの鳳翔閣―武豊町の鳳翔閣、附米子の鳳翔閣

愛知県武豊町は、知多半島の中程、東側の知多湾に面しており、名古屋から電車で一時間程度。現在は名古屋工業地帯の一部をなしているが、江戸時代以来、港湾都市として栄えていた。

この武豊に明治天皇の行幸があったのは、明治二〇（一八八七）年、第八次の近畿東海方面巡幸の途次であった。京都・大阪・名古屋を廻った天皇は、武豊の地で、陸海軍の対抗演習を観覧した。この間の概略を記す<sup>(10)</sup>。

明治二〇年、天皇は皇后とともに、父親の孝明天皇の二〇年祭のため、京都に赴く。その後、二月二三日に名古屋から汽車で南に下り、武豊村（当時）の道崎仮停車場で下車。長尾山の鳳翔閣に行く。長尾山は当時は標高三二〇程度の丘で見晴らしがよく、知多湾を俯瞰できたという<sup>(11)</sup>。

ここには、もともと県会議長端山忠左衛門の控家（別荘）が設けられていたのだが、亀崎町で望洲楼という料亭を営んでいた成田新左衛門がこれを購入し、望洲楼の支店とすべく改築をしていた。そこへ、宮内省から普請を延期せよとの命令があり、愛知県知事らが来豊して、その建物を行在所とするとの指示があった。そこで成田は改築を変更し、天皇の滞在に便になるよう洋装に変え、二階を広間にして天皇の玉座を置いた（図11）。

また天皇の演習観覧の便のため、丘の上に「観兵台」を設け、御野立所と言った。

二三日当日、天皇は先ず鳳翔閣で休憩し、昼食を摂った後、御野立所へ赴き、眼下で展開されている演習を観覧した。午後三時には丘を下って道崎仮停車場から出発し、三時半には武豊港から

軍艦浪速に乗船して、海路東京へ向かった。天皇の鳳翔閣滞在は、短時間だったようである。

そしてこの行在所の施設を「鳳翔閣」と名付けたのは、皇后宮大夫の杉孫七郎であるとされる<sup>(12)</sup>。そして「鳳翔閣」の碑が作られ、鳳翔閣の傍らに立てられたという。

その「鳳翔閣」の碑は、現在は武豊町役場の前庭に立つ。表面に「鳳翔閣」の文字が彫られ、「元帥伯爵東郷平八郎書」とある（図9）<sup>(13)</sup>。裏面には、明治二〇年の大演習の際に天皇皇后が来豊し、鳳翔閣に泊まったこと、今上（大正天皇）が明治二四（一八九一）年に南伊勢（三重県東二見村）に行啓し、その帰途、武豊に来て、長尾山で松を植樹したことを記す（漢文、図10）。大正九（一九二〇）年八月の作とある。撰文は阪本鈺之助<sup>(14)</sup>で、書は大島徳太郎である<sup>(15)</sup>。

この武豊鳳翔閣の場合、命名者は杉孫七郎で、石碑の揮毫者は別人の東郷平八郎である。

### 附、米子鳳翔閣

さらに島根県の米子にも鳳翔閣という名の、皇室の行啓にちなむ建物があった（図12）<sup>(16)</sup>。

これは明治天皇ではなく、大正天皇が皇太子時代に訪問したときに居室として明治三九（一九〇六）年末に新築されたもの。皇太子の山陰行啓を控え、巡視先となる町では宿泊先となる立派な宿所を争って新築したが、米子鳳翔閣は特に注目される施設だったという。



図10 武豊鳳翔閣の碑 背面



図9 武豊鳳翔閣の碑 表面



図12 米子鳳翔閣（「新修米子市史」より）



図11 武豊鳳翔閣（「武豊町誌」より）

命名の由来などは不明で、建物自体もその後公会堂などに転用され、昭和四五（一九七〇）年には取り壊され、跡地には門柱しか残っていないという。

こうした武豊鳳翔閣や米子鳳翔閣の存在は、浦和鳳翔閣の名の由来が建物の姿であろうとする説を疑わせるものである。鳳輦、すなわち天皇の乗り物、ひいては天皇がそこに降り立ち、そしてそこから高く飛翔していく建物という意味での命名であるのが妥当のように思える。そして武豊鳳翔閣の命名者と石碑の揮毫者とは別々であることは、浦和鳳翔閣における「揮毫者である三条実美が命名者でもある」という説に疑義を抱かせる。三条は、あらかじめ付けられていた名前を揮毫しただけかもしれない<sup>(17)</sup>。

#### （四）行在所後の鳳翔閣と二つの額

行在所は、その役目を終えた後は、当初の目的に使用して構わないことになっていた<sup>(18)</sup>。鳳翔閣も、師範学校の校舎として使用され始める。

ここで、埼玉師範その他の学校のキャンパスの変遷を年表風にまとめ、二つの額についてもまとめておく。

##### ①鳳翔閣

- ・明治六年、埼玉県、改正局開設（旧浦和宿本陣跡…現仲町）
- ・同七年、埼玉県師範学校と改称、岸村に専用校舎新築（図13）
- ・同八年、県立中学校、同九年、医学校を併設
- ・同一一年、稻荷丸の地に新校舎（鳳翔閣）を建設し移転
- ・岸校舎は中学校が使用
- ・同一二年、中学校、県立中学師範学校と改称

○明治一三年作成の、陸軍参謀本部陸地測量部作成「彩色迅速測図」「浦和驛」は五千分一（図14）。これを見ると、現在の埼玉会館の場所に「埼玉県立小学師範学校」、今の岸町の東和銀行の場所に「埼玉県立中学師範学校」の名が見える。

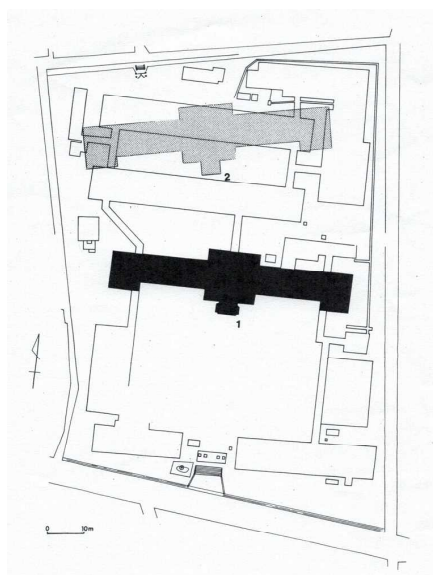
- ・同年、最初の埼玉県議会、鳳翔閣を会場として開催<sup>(19)</sup>
  - ・同一五年、中学師範学校を小学師範学校へ統合
  - ・同一九年、埼玉県立尋常師範学校と改称
  - ・同三一年、再び埼玉県立師範学校と改称
  - ・同年、民間団体である埼玉教育会が、私立埼玉女学校設立敷地）に新校舎を建てて移転（鹿島台キャンパス）
  - ・同年、私立埼玉女学校、埼玉県立高等女学校（以下「埼玉高女」）へ発展的解消し、鳳翔閣に入る
  - ・同三四年、埼玉女師開校し、鳳翔閣に入り、埼玉高女と同居
  - ・同四〇年、「行在所記念之碑」（以下「行在碑」）建立
  - ・正門のすぐ外に建てられた（図4）<sup>(20)</sup>。
  - ・同四四年、埼玉高女分離独立、現在の浦和第一女子高等学校の敷地に新校舎を建設して移転
  - ・大正一三年、埼玉女師は、六辻村別所（現附属中学校用地）に新校舎を作って移転し、鳳翔閣は埼玉県立図書館として使用されることに。
  - ・同一五年、埼玉会館新設のため、鳳翔閣を後方（北側）へ移転（図15）<sup>(21)</sup>、行在碑は、鳳翔閣Ⅱ図書館玄関前に移動（図5）
  - ・昭和八年、鳳翔閣、明治天皇聖蹟として「史蹟」指定
- 行在碑の側に「史蹟指定の碑」建立（図1）<sup>(22)</sup>



- ・同三五年、県立図書館新館建設、鳳翔閣解体
- ・同四七年、浦和市立郷土博物館、鳳翔閣を模して開館（図16）
- ・平成一三年、さいたま市立浦和博物館に改称



図13 岸村校舎（「百年史」より）



2が移築後の位置

図15 鳳翔閣の配置図面（1が移築前、

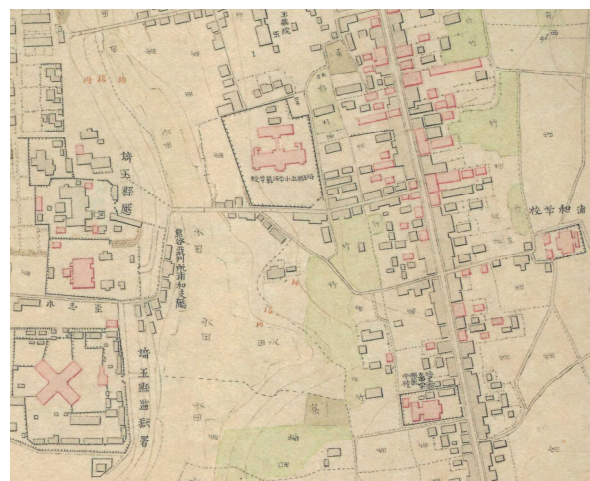


図14 彩色迅速測図「浦和」



図16 現在の博物館

図17 鳳翔閣（明治一二年）



バルコニー拡大図



図18 女師玄関の白根額（埼玉女師同窓会「会報」より）



## ②三条実美書の額

岸田証言によると、行在所開設当初の明治一一年八月末から「楼上の正面に」掲げられていたようである。図17は明治一二（一八七九）一〇月一八日付の写真であるが、三条の額が確認できる。おそらく明治三十三年に鯛ヶ窪に移転するまでは、ここに掲げられていたものと思われる。

そして埼玉師範が鳳翔閣を出てからは、鹿島台の新校舎に移されたものと思われる。大正年間の埼玉女師の写真では、二階のバルコニーに三条の額が無いことが確認できる（図4）。

また、埼玉師範の生徒会にあたる共攻会の機関誌「鳳翔」第三七号（昭和九（一九三四）年三月一八日刊行）「学校便り」に「鳳翔閣の衝立を玄關入口へ立てました。これは火災前<sup>23</sup>）玄關にかかげてあったものです」とある。先に引いた現在浦和博物館所蔵の三条額の裏書きに「本校二冠スル鳳翔閣ノ名ヲ以テシ……昭和八年五月二十七日」とある「本校」とは埼玉師範を指しているよう。つまり三条額は、もともと鹿島台校舎の玄關に掲げてあったものが、昭和八年に改装され、同九年に改めて玄關入り口に立てられたことになる。

その後、この額がどういいうきさつで、埼玉師範から浦和市へ移管されたのかは分からない。

## ③白根多助書の額

白根の額は、岸田によると「楼下の入口正面」に掲げられていたという。埼玉女師の、明治四五（一九一二）年の写真でも確認できる（図18）。

それが、昭和八年の「鳳翔」第三八号（学校便り）では「玄關

に教化風行文光奎照の大額が掲げられました。明治十一年埼玉縣令白根多助氏の書になり實に立派なものでこれは本校舊校舍現在の埼玉圖書館より移したものであります」とある。これによると、大正一三年、埼玉女師が鳳翔閣を出ると、白根額はそのまま鳳翔閣に残され、県立図書館の管理となっていたようである。それが昭和八年に至って、埼玉師範に移管されたようである。この額は現在埼玉大学教育学部の下にある。

### 五―三 建碑の経緯と背景

#### (一) 建碑の主体者

行在碑の建設を構想し、実行した中心人物は、当時の県知事で、碑文の撰者である大久保利武であろうと思われる。

#### ①「記念碑設立の趣旨」

行在碑建碑の趣旨を記し、設立のための寄付を呼びかけたものに、大久保利武と吉田茂助が発起人総代となって発した「記念碑設立の趣旨」がある<sup>(24)</sup>。次に翻刻を掲げる。(空格は□で記した)

#### 記念碑設立ノ趣旨

元ノ埼玉縣師範學校即チ今ノ埼玉縣女子師範學校及  
ビ埼玉縣立浦和高等女學校ノ地ハ明治十一年八月三  
十一日□天皇陛下東北御巡幸ノ途次辱クモ□行在所  
ニ充テサセ給ヒシ處ナリ凡ソ些ノ事績モ名教ヲ裨シ  
徳化ヲ益スルニ足ルモノハ猶石ニ刻シ文ニ著ハシテ  
傳ヘザルハナシ然ルニ斯ノ地爾來流光夢ノ如ク歳華

數旬ヲ經テ之ヲ傳フルニ金石ナク之ヲ載スルニ文字  
ナク今ヤ將ニ之ヲ知ルモノ無カラムトス是レ豈教化  
之道ナラムヤ豈亦縣民ノ心ナラムヤ是ヲ以テ同志相  
謀リ碑ヲ□行在ノ跡ニ建テテ永ク□聖徳ヲ仰ギ且教  
化ノ一助ト爲サムト欲ス嗚呼縣下有志ノ諸士殊ニ教  
化ニ心ヲ致サル諸君ヨ希ハクハ我等ノ微衷ヲ諒シ  
奮ツテ之ガ舉ヲ賛ケ其ノ赤誠ヲ合シテ不朽ノ碑石ト  
作サムコトヲ

明治四十年一月

發起人總代

大久保利武

吉田茂助

追テ贊助ノ諸君ハ左ノ各項ニ從ヒテ應募アラムコト  
ヲ請フ

一 建碑ノ費用ハ約壹千圓トシ其設計ハ發起人ニ一  
任セラレムコトヲ望ム

一 寄付金ノ申込期日ハ明治四十年四月末日ヲ以テ  
限トス

一 寄付金ハ埼玉縣廳第二部埼玉縣師範學校又ハ埼  
玉縣女子師範學校ニ宛テ便宜申込マレタシ

\*傍線部で「三十一日」とあるのは「三十日」の誤り<sup>(25)</sup>。

建碑の理由については碑文とほぼ同じ。元埼玉師範、現在の埼玉女師と埼玉高女があるところ（鳳翔閣）は、明治一年に明治天皇が行在所とした場所である。「名教を裨<sup>たす</sup>け徳化<sup>ま</sup>を益す」ような事績は、文章に記し金石に刻んで後世に伝えるべきものであるのに、埼玉の行在所跡はそれらがなかったために忘れ去られようとしている。それは教化の道ではなく、県民が望むことでは無いとし、行在所跡に石碑を建立して顕彰することで、天子の徳を仰ぎ、かつ教化の一助としたい、として寄付を募るものとなっている。

この文では、天子の徳をたたえる常套句がちりばめられているが「教化の道」「教化の一助」というように「教化」の語が繰り返されていることに注目したい。すなわち、大久保等は、この石碑を「教化」を目的として作ろうとしたのである。この点は後述。

最後に附されている注意事項によれば、寄付金は、県庁の担当部署、師範学校、埼玉女師に持参することとあり、この組織の事務局を県庁が担っていたことが分かる。

## ②「みくるまの跡」と「行在所記念碑引渡之件」

建碑が実現したのちの明治四〇年一月一〇日に発行された「みくるまの跡」という小冊子がある。編集兼発行者として「行在所記念碑設立委員」（以下「設立委員」）とあり、所在地を「埼玉県庁内」としている。この設立委員が建碑を計画実施したものと思われる。

また、埼玉県立文書館所蔵の「埼玉県学務部」関係文書の中に「行在所記念碑引渡之件」がある<sup>(26)</sup>。明治四一年一月一八日付のもので、「有志者が建設」した「行在所記念碑」を引き渡す旨を、女子師範学校長と浦和高等女学校長宛に言い渡すものとなっ

ている。付記されたメモに次のようにある。

「行在所記念之碑建設ノ儀客歳八月一日工事ニ着手シテ同十二月二十日竣工……明治四十一年一月十五日 行在所記念碑建設委員総代大城戸宗重<sup>(27)</sup> 埼玉縣知事島田剛太郎殿」とある。「記念碑設立」と「記念碑建設」の違いがあるが、おそらくこれは誤記であって、同じものを指していると考えられる<sup>(28)</sup>。

この、県庁が事務局を担った設立委員が、実際に建碑を担った組織だったのである。そしてこの委員と、前節で触れた大久保を代表とする設立呼びかけの組織とは、事実上一体だったと考えられる。

「みくるまの跡」は、口絵に石碑の表面の写真と裏面の拓本を掲げ、内容は、明治一年の巡幸の内容をまとめた「みくるまの跡」本文と、当時作成され徳大寺侍従をへて天皇に奉呈された「祝辞詩歌」<sup>(29)</sup>、建碑の経緯を述べた「建碑の記」の三部構成となっている。「みくるまの跡」本文は、埼玉県庁の記録「北越御巡幸書類」（編冊七巻）をまとめたもので、「祝辞詩歌」もおそらく県庁に保存されていたものを、あらたに活字化したものである。最後の「建碑の記」のみが、今回新たに作成されたものである。しかし、設立委員による「建碑の記」は、実は、先にあげた大久保らによる「設立の趣旨」をそのまま転載したものであった。

大久保知事が、吉田議長とともに旗振りとなって、資金集めの呼びかけをした。しかしそうして民間から集めた資金を使った事業を、公人である知事が直接行うわけにはいかない。そこで「有志者」による設立委員をたちあげ、そこが建碑にたずさわったという形式を取った。そして設立委員の所有として完成した石碑を、

設置場所の旧埼玉師範（現埼玉女師）に移管するという形をとったのであろう。勿論、事実上の主体は大久保知事であり、すべての事務は県庁が担当したのである。

### ③「みくるまの跡」記載の寄付呼びかけ人

明治四〇年一月の「設立の趣旨」には「発起人総代」として大久保知事と吉田議長の名前しかないが、「みくるまの跡」の「建碑の記」では大久保と吉田の他に、三〇人の発起人の名を記している。その中で経歴などが分かるものをあげる。

#### ●発起人代表

- ・大久保利武 埼玉県知事
- ・吉田茂助 埼玉県議会議長

#### ●発起人

- ・畑為吉 埼玉県議會議員。
- ・早川光蔵 北足立郡長
- ・長谷川敬助 埼玉農工銀行頭取
- ・田中左司馬 政党幹事
- ・中村悦蔵 県議会議長
- ・大島寛爾 地元の財界人・実業家
- ・小島政吉 埼玉師範学校長
- ・会田亀太郎 県會議員

県知事・県議議長をトップに、当時の政財界の大物達が名を連ねている。建碑は埼玉県の官民挙げての事業だったことが分かる。その中に、埼玉師範学校長小島政吉が名を連ねていることに注目しておく。

## （二）明治四〇年になって建碑した理由

大久保等が石碑を作った理由については、碑本文や「設立ノ趣旨」などに明記されている。繰り返しになるが、それは埼玉師範の地は、明治一年に天皇の行在所となったところであり、神聖で、教育にとっても重要な場所であった。ところが学校の入替わりなどにより、そのことが忘れ去られる危機にある。そこで石碑を建て、文章を刻んで残そうというのである。

では、なぜそれが明治四〇年でなければならなかったのか。天皇の行幸から三〇年あまり経過した今になって、建碑が取りあげられた背景には何があるのだろうか。

この点について、明確に実証できることではないが、二つの要因があるのではないかと、推測している。そこで本節ではその推測について述べたい。要因とは「明治天皇聖蹟」と「埼玉師範における学校紛擾事件」である。

### ①明治天皇聖蹟

大正八（一九一九）年、「史蹟名勝天然記念物法」が制定され、明治天皇が行幸するなどした縁の深い場所は「明治天皇聖蹟」として国の文化財に指定されることとなる。そこへ至る前史をまず概観する<sup>（30）</sup>。

明治維新後、廃仏毀釈の風潮の中で、それに抗して伝統的な文化や文物を保護する動きが出てくる。明治三〇（一八七九）年には「古社寺保存法」が制定されるが、そこでは皇室に関わる施設や歴史上由緒のある社寺の建造物、宝物の保存に関心が向けられていた。民間に「帝国古蹟取調会」が結成され、史蹟の認識を高める民間運動が始まる。こうした動きを受けて、明治四四（一九

一一)年三月、貴族院議会に「史蹟及天然記念物ニ関スル件」が建議され、可決される。同年一月には、建議案提出者が中心となって史蹟名勝天然記念物保存協会が発足し、世論喚起の運動を展開する。この会は民間とはいいながら、当時の顯官貴紳学者による任意団体であり、事務所を内務省に置くという、事実上、国策を推進する存在であった。そして明治天皇の死去をはさんで、大正三(一九一四)年から、活動広報誌「史蹟名勝天然記念物」の刊行がはじまり、具体的な史蹟等の候補を順次あげてゆく。こうした動きを受けて「史蹟名勝天然記念物法」の制定となった。

法制定を受け、各府県では、史蹟等の候補地の選定を行うが、埼玉県でも、同一〇(一九二二)年に史蹟名勝天然記念物調査会を作り、調査保存に着手する。同一三(一九二四)年には、特に明治天皇が訪れた場所について調査し、四三箇所をあげ、「明治天皇御遺蹟之部」としてまとめている<sup>(31)</sup>。

そして昭和八(一九三三)年に至り、文部省告示として最初の聖蹟としての史蹟指定があり、「行在所」「小休所」「御野立所」など八六件が指定された。埼玉県では、浦和行在所(鳳翔閣)を含む三件が対象となった。

この明治天皇聖蹟は、昭和二三(一九四八)年、GHQの指示により一斉に指定解除される。それは「天皇に対する過剰な尊敬に関係するもので……明治天皇が使用した場所や明治天皇ゆかりの特定の場所に対して示される特別の敬意」があるのがよろしくなく、格下げさせるべきである、という趣旨に基づく。GHQのこうした評価は、戦前において、明治天皇聖蹟が、天皇への敬意を涵養するものとして期待され、機能していたことを物語る。

浦和行在所(鳳翔閣)も、そうした明治天皇に直接関わる聖蹟となることにより、いわば「聖地」としての性格を帯びることになったのである。

大久保らの「行在所記念之碑」建立は、明治四〇年と、貴族院議会における決議に先立つこと四年である。しかし、すでに「古社寺保存法」以降、皇室に関わる場所への特別視が進んでいた。その流れの中で、埼玉師範を明治天皇と結びつけて、その存在を顕彰し、誇りある存在であることを内外に訴えようという意図が働いていたのではないか。

## ②学校紛擾事件

前節では、建碑の背景として、大久保らは、埼玉師範が誇りある存在であることを内外に訴えようとしたのではないかとした。それでは、その当時、埼玉師範の誇り、とはどういう状態になっていたのだろうか。この点についても十分な検証ができていないわけではないが、当時埼玉師範では学校紛擾が頻発していたことに注目したい。

「学校紛擾」とは「学校の管理・運営問題を中心とする学校内での管理者・教職員と学生・生徒・児童らの集団との対立抗争の諸事象」を言う(佐藤秀夫)<sup>(32)</sup>。

佐藤によれば、確認できる最も古い学校紛擾事件は、明治一六(一八八三)年の東京帝国大学学位授与式拒否事件であるという。そして中等教育レベルでは、同年の滋賀県立師範学校事件が最初で、「中等学校レベルの紛争は、一八八〇年代後半から九〇年代(明治二〇年代から三〇年代初期にあたる)にかけて、師範学校を主要な舞台として頻発するように」なる。師範学校で紛擾事件



が頻発した背景として、佐藤は「管理体制も他の種類の学校に比して秩序だてられていたこと」、森有礼文相の師範学校改革により「陸軍をモデルとした集団訓練が最も徹底して進められ」ていたこと、「全員寄宿制での日常生活への統制が強められていたこと」「卒業後の教職服務義務が強化」されていたことをあげる。

そして関東における初めての学校紛擾事件は、明治二四（一八九一）年、埼玉師範で起こった。

同二四（一八九一）年に赴任した町田則文学校長は、校風の振興のため、欠席者の再試験を認めないことを含む諸規則の改正をはかり、管理を強化する施策を行った。これに反発した生徒達は同年一〇月に旅館に立てこもり帰校を拒絶したため、同月、町田は総計一一八名を退学処分とした。さらに反発した生徒達は知事に上申したが受け入れられず、県議会議員や地元有志へも具陳。文部省から視学官が調査に来るなどの大事となる。全郡長からの復校願いなども出され、一月には全員が復校となるが、一二月には教頭や舎監が責任を取らされて免官となるに至る。埼玉師範の名を大いに落とす事件であり「従前他ノ模範学校ト称揚セラレタル我師範学校モ今ヤ昔日之觀ナキノミナラズ」<sup>33</sup>と評された。

その後も明治二八（一八九五）年一月には、生徒全員の連名で、ある教官が「教授不熱心遇節不親切」だとして当該教官の授業を受けないことを校長と知事に提出した。この時は生徒達が反省したとして謹慎一週間の処分で終わる。さらに同三七（一九〇四）年九月には、「祝賀式で疲労」として全校生徒が授業を欠席、同十二月には「夜間に舎監室で粗暴行為をするものがある」として、いずれも学校長から訓戒処分を受けた。そして同三八年二月、

埼玉県の政界を巻き込む大事件が起こる。

#### a 明治三八年同盟休校事件

埼玉師範の学校紛擾事件としては、明治二四年のものがよく取りあげられるが（「埼玉県教育史」など）、そのインパクトとしては、明治三八年の事件が一番大きかったのではないか、

その概要は次の通り。

明治三八（一九〇五）年二月八日夜、生徒から寮の舎監に対し、「二月十日は日露戦争開戦一周年にあたるので休校して祝意を表したい」と申し出た。翌九日には文書で校長に申し出をしたが、認められなかった。そこで生徒側は伊藤徳定校長が専制的で親切であるとして全校生徒の連名で、県に対して校長の転任を願い出た。これを受けた当時の木下周一知事は、「生徒として校長を排斥するが如きは以ての外」と願い出を拒否。生徒側は「文部当局に陳情」するため、二月九日に一斉に「同盟休校」に入る。これを聞いた木下知事はさらに激怒し、校長に命じて生徒二三八名を無期停学処分とした。

かくして事態は政治問題と化し、吉田茂助議長は文部省を訪れて「木下知事のとった措置は片手落ちであること、校長の態度ならびに言行に不都合な点があること」<sup>34</sup>を述べ、調査を求めた。文部省からは督学官が派遣され、調査が行われた。結果、生徒六名は退学となったが、他の停学は順次解かれた。一方、学校側にも不備があったとして、伊藤校長は、同年九月一日を以て依願免職、木下知事も事実上左遷である大分県知事への転任を九月九日に命ぜられるに至った（木下は任官を拒否して辞任し、二年後に没した）。



これまでの紛擾事件では、停学者は出すものの、最終的には全員が復学していた。しかし、今回は六名の退学者を出す、という、教育機関としてはあってはならない痛恨の事態に立ち至った。しかも生徒達の行動が、校長の更迭はおろか、県知事の左遷まで引き起こすという、対外的な影響も甚大であり、埼玉師範始まって以来の一大不祥事件であったといえる<sup>(35)</sup>。

佐藤は師範学校における学校擾紛事件の背景のひとつに「陸軍をモデルとした集団訓練の徹底」をあげていたが、まさに埼玉師範は、明治一八年、森文相の来校演説があったところであり、兵式体操の実施などの師範学校改革のモデル校であった。それゆえ管理的な圧力もことさら強く、生徒達の反発もそれだけ大きかったのだろう。明治三八年の擾紛はそのピークであったといえよう。「百年史」は、この事件を記述した後に、師範学校当局の一年の回顧として次の文を引用している（「学校事業及成績概覽」）

抑抑明治三十八年ハ我ガ校混乱ノ年ナリ。爾後職員生徒同心一体、之ガ傷痕ヲ恢復シ、之ガ進歩發展ヲ図ルニ於テ孳孳汲汲唯及バラシヲ恐ル。

さらに翌三十九年の回顧として次の文を引く。

若シ夫レ此一箇年間ノ事業ニシテ混乱後整理ノ緒ヲ開クニ於テ多少取ルベキアリ。将来職員生徒益々協力戮力シテ同一方針ニ進ミ愈々奮励事ニ従ハバ、数年ノ後或ハ改善ノ績ヲ見ルニ庶幾カランカ……。

この一年間は、混乱を整理することにおいてわずかながら成果があった。こうして職員生徒皆が協力して努力していけば、数年後には改善を見ることができるかもしれない、と学校の信頼回復に向けた将来を語るが、そのトーンは暗く控えめで、悲観的とも言えるものであった。

#### b 新校長小島政吉

では、この埼玉師範の再建を託されたのは誰かと言えば、愛知県第二師範学校長から転任してきた小島政吉であった。

小島は、長野師範学校と東京高等師範学校を卒業、長野県師範学校教諭等を経験して、三八歳で埼玉師範に赴任した。

荒れて自信と信頼を失っていた埼玉師範において、小島は「たんに厳格主義一点張りではなく、さまざまな施策により、生徒と一体になって、校風改革に鋭意とりこんでいった」（「百年史」）。

彼の事績と評価について、小島校長頌徳胸像建立趣意書には次の文がある（「百年史」引「謙堂遺稿」）。

嚴父慈母ヲ一身ニ兼テ和氣鳳翔閣ニ満ツ。或ハ校訓ヲ定メ或ハ賢哲景仰ノ会ヲ開キ言行以テ導ク。……即チ森文部大臣ノ囑望ト天覽台覽ノ榮譽トヲ懷ヒ昔日ノ光輝ヲ今ニ新ニセムトシ。

頌徳の文章であるから褒め言葉以外はありえないが、小島が高見から生徒を見下ろすのではなく、率先して生徒たちと接し、対話して、導こうとしていたことが伺える。

傍線部に注目したい。小島を評する言葉として、天覽台覽とい

う榮譽を受けたことを想起して昔日の光輝を今によみがえらせようとした、という。ここは体育の隆昌を述べた箇所に続くもので、「天覧」は、直接には、兵式体操を天皇に披露した明治二年のことを言うのであろうが、「昔日ノ栄光」とあれば、明治一年の行在所のことも含まれると考えてよいのではないか。

つまり小島政吉の使命は、地に落ちた埼玉師範の自信と信頼を回復することにあつたのだが、その方法の一つとして、埼玉師範が、かつて天皇や皇族という神聖なる權威に認められたことを想起して、その栄光を復活させることによる、としているのである。

ここで行在所記念之碑に戻るが、設立趣意書の発起人の中に、錚錚たる埼玉県政治家・実業家に交じり、小島政吉の名があつたことを想い出して欲しい。石碑は埼玉師範・鳳翔閣に関わるものであるがゆえに、埼玉師範学校長の名があるのは当然かもしれない。しかし、小島が石碑の建立に極めて積極的であつたと推測するのはそれほど間違っていないのではないか。

つまり、行在所石碑を、明治四〇年の段階で建立することは、天皇の行幸を賜り、授業をも御覧にいられたという、明治一年の埼玉師範の榮譽と誇りを、再び強調することになるのである。それは自信と信頼を失い、前に進めずにたたずんでいる埼玉師範にとって、進むべき方向を示す道しるべなのではないか。小島が発起人に名を連ねた背景をこう読み解くのはどうであろうか。

#### ○ 新知事 大久保利武

また知事の大久保利武も、明治三八事件で失脚した木下周一に代わって埼玉県知事を委ねられた者であつた。

小山博也は<sup>(36)</sup>、大久保の埼玉県知事としての事績を述べるが

「大久保の前任者木下周一は師範学校生徒の懲戒に関する事件で失脚した」が、当時県政刷新の急務のひとつが「教育」であつたとされ、大久保も自認していただろうとする。県立学校の設置者たる知事として、師範学校のでこ入れと名誉復活は果たさなければならぬ大事だつたと思われる。

大久保とともに発起人総代となつたのは、県会議長の吉田茂吉であつた。彼は事態の收拾を図るために文部省へ赴いており、師範学校紛擾事件のただ中にいた一人である。

以上、新知事の大久保と吉田議長、新校長の小島は、いずれも師範学校紛擾事件に深く関わっており、師範学校の名誉回復と復活を強く願っていた。彼等はそのために様々な取り組みをしたが、明治一年の慶事である天皇の鳳翔閣行幸を再び想起して、師範学校の栄光を取り戻す手がかりとして、石碑の建立を行ったのではないか。

#### 注

(1) 拙稿「天皇の巡幸を契機とする埼玉県師範学校に関わる石碑について(その二)」「鳳翔記光碑」について」「『埼玉大学紀要(教育学部)』第七二巻第二号においては「鳳翔記光碑」を扱った。

(2) 嘉津山清『御碑銘彫刻師宮龜年』(第一書房、二〇二〇)。なお、行在所記念碑設立委員会編集発行『みくるまの跡』(一九〇七年十一月)所収の「建碑の記」には「碑は仙臺石高一丈三尺臺石花崗石長八尺五寸高三尺」とある。

(3) 小山博也「歴代知事―人と業績―その二」第一三代 大久保利武『埼玉県史研究』三五号(二〇〇〇)。

(4) 与謝蕪村は、漢詩を作るときは「謝蕪邨」と号し、荻生徂徠は己の祖先が物部氏だとして「物茂卿」と名乗った。いずれも漢音で音読みすべき。

(5) 原文「聖詔特宏皇謨、以興教學之化矣」であるが、天子の詔勅による教育の振興を述べているとするならば、直接的には、明治二三（一八九〇）年発布の教育勅語のことを指していると思われる。

(6) 原武史『可視化された帝国 近代日本の行啓行』（みすず書房、二〇〇一）。

(7) 高山清司「鳳翔閣について―特別展「鳳翔閣百年」を開催して―」『浦和市立郷土博物館研究調査報告』第六集、昭和五四（一九七九）より。

(8) 「東京日日新聞」明治二十一年八月二十九日分は、国立国会図書館の所蔵で、新聞室のマイクロリーダーで読むことができる。

(9) 前掲柳瀬。

(10) 『明治天皇紀』、文部省『史蹟調査報告 第9輯 明治天皇聖蹟』（一九三六）、楠喬「明治天皇と日本最初の陸海連合大演習」（昭和四七（一九七二）、以下「楠」）及び成田新左衛門手記「武豊行在所」（上記二篇は『武豊町誌』（一九七九）資料篇2収録）による。この武豊鳳翔閣は、長尾山の中腹頂上付近をエリアとする「明治天皇長尾山御野立所」として、昭和八（一九三三）年一月に「明治天皇聖蹟」の指定を受けているが、これは「明治天皇浦和行在所（つまり鳳翔閣）」の指定と同時であった。明治天皇聖蹟については、後述する。

(11) 長尾山は、楠が「先年、海岸埋め立て土地造成……この長尾山が山ごとこの土を全部削り取って海中に投入されてしまった」というように平坦な更地にされており、今は起伏は全くない。その跡地に現在のは町役場が建てられている。役場の敷地内の石碑によれば、長尾山の名前を残すため

に、あらたに「長尾山」という字名を作り、この地にあてた、また役場の建物の高さが、ちょうど旧長尾山の頂上と同じになる、という。

(12) 武豊鳳翔閣の命名者について、楠は「皇后宮大夫の杉孫七郎が「鳳翔閣」と名付けた」と書いているが、その根拠資料は未見。杉孫七郎は、天保六（一八三五）年から大正九（一九二〇）年。長州藩士で、明治維新後は山口藩副大参事を皮切りに諸職を累進、明治一七（一八八四）年から同三〇（一九〇七）年まで皇太后宮大夫をつとめた。楠が「皇后宮大夫」とするのは誤りか。

(13) 東郷平八郎 とうごうへいはちろう。弘化四（一八四八）年から昭和九（一九三四）年。明治四〇（一九〇七）年に伯爵、大正二（一九一三）年に元帥。

(14) 阪本鈺之助 さかもとさんのすけ。安政四（一八五七）年から昭和一一（一九三六）年。愛知県鳴尾村（現名古屋市）生。内務官僚・福島県知事等を経て、明治四四（一九一一）年から大正六年まで名古屋市長。同年八月二四日から貴族院議員（大正一三（一九三四）年まで）。撰文したのは、名古屋市長をやめ、貴族院議員になったときのことである。

(15) 大島徳太郎 おおしまとくたろう。生年不詳。没年昭和一一（一九三三）年。壮年より愛知県庁に勤務し、書に関する仕事をしていた。退官後は専ら書家として活動。号は君川。

(16) 『新修米子市史』第三卷、第一三卷（一九九六）。

(17) 現在（二〇二三年三月）配付の、さいたま市立浦和博物館発行のリーフレット「鳳翔閣」には「建物の名前は「鳳翔閣」と名付けられ、時の太政大臣三条実美が揮毫した「鳳翔閣」の額が2階バルコニーに掲げられ」とのみ記し、命名者を記さない。

(18) 武豊鳳翔閣についても、「右行在所は普通なれば使用出来がたきも、

始め營業に設立せし故を以て、營業不苦との御沙汰に依り、中新支店として開業の運びに至」ったという（成田）。米子鳳翔閣も、旅館として使われた。

(19) 埼玉県議会史編纂委員会『埼玉県議会百年史』（一九八〇）。当時の写真や座席図を見ると、最も広い講堂を使用したようである。なおこのとき、医学校の廃止が議決された。

(20) 「みくるまの跡」所載の「建碑の記」では「女子師範學校の門外に儼乎たる一大碑の立つを見る」と記す。

(21) 高山清司「鳳翔閣の建立位置について」『浦和市立郷土博物館研究調査報告』第一四集（一九八七）より。

(22) こうした碑は、聖蹟史跡指定を受けた場合、多くの場所で作られている。なお、戦後、GHQの指導で、明治天皇聖蹟は史跡指定解除となるが、埼玉ではこの聖蹟指定の石碑を地面に埋めて隠したようである。それが、図書館の改築を契機に「発見」された、との記事が「埼玉新聞（昭和五年一月二〇日）」に掲載されている。

(23) 昭和五（一九三〇）年二月六日、本館から失火し、本館は全焼し、講堂は半焼した。この時三条額も火にかかり、汚損したのではないか。それを同八年に至って改装したのだろう。

(24) 埼玉大学教育学部では、「百年史」作成後、散逸をまぬがれた文書類を整理し、「埼玉県師範學校文書」としてまとめ（文書は現在、教育学部事務倉庫2の壁面の棚に収録）、目録を作成した（新井淑子・在塚礼子「本学部の歴史的資料を公開・活用できるような形にするための基礎的作業」（以下「歴史的資料基礎作業」平成一八（二〇〇六）年三月調。この目録は教育学部長室書棚）。内容が通じるものはひとつのボックスファイルにまとめ、ボックスファイル毎に、基本的に年代順に番号が振られている。「設立碑設

立の趣旨」は、No.19。またこの「趣旨」は、その本文が、建碑の後に作られた「みくるまの跡」に「建碑の記」として引用されている（片仮名を平仮名に改め、注意事項は省く）が、あわせて行在碑の本文を翻刻している。

この「みくるまの跡」の記事は、さらに、大正一三（一九二四）年刊行の『自治資料 埼玉縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第貳輯 明治天皇御遺蹟の部』（埼玉県立浦和図書館により『埼玉県立図書館復刻叢書（十三）』として、平成元（一九八九）年に原文どおり復刻）に転載されているが、誤記が多い。

(25) 「みくるまの跡」では、「三十日」に改められている。

(26) 文書番号「明四四三五」の「七六」。

(27) 大城戸宗武は不詳。

(28) 「設立の趣旨」とあわせ考えると、明治四〇年一月に寄付を呼びかけ、四月末に締め切り、八月一日に石碑作りに着工して、一月二〇日に竣工とある。ところが「みくるまの跡」では同年一〇月上旬に竣工して、同一三日には、三条実美の娘である閑院宮妃智恵子殿下を招いて除幕式を行った、とあり、竣工の時期に食い違いがある。除幕式のことを考えると、一〇月上旬にはある程度できあがっていて式を行い、書類上の最終的な完成が一二月だったのかもしれない。

(29) 「祝辞詩歌」は、埼玉県第二区区长高橋庄右衛門（不詳）の「上巡幸祝詞」に始まり、四九名が書いた、天皇をことほぐ和歌や漢詩を並べたものである。氷川神社の禰宜や教員などの知識人の作もあるが、川越町平民の井上安兵衛（九〇歳）や横見郡谷口学校上等四級生鈴木英子（一二歳二月）・同校下等七級生新井丈右衛門（五歳三月）など子どもの作品まで収録されている。末尾に「以上九月一日於熊谷驛行在所徳大寺宮内卿へ差出候處御請取に相成候事」とあり、埼玉県庁史誌編輯官芳川俊遂の「詩歌輯録

跋」にも「白根県令がこの詩文集を徳大寺宮内卿に差し出し、夜に天覧にあずかった」という趣旨を記している。

(30) 文化庁『文化財保護法五十年史』(ぎょうせい、二〇〇一)、北原糸子「東京府における明治天皇聖蹟指定と解除の歴史」『国立歴史民俗博物館研究報告』(第一二二巻、二〇〇五)等による。

(31) 前掲注10。

(32) 佐藤秀夫『教育の文化史』2巻『学校の文化』「学校紛擾の史的研究」阿吽社、二〇〇〇年(もと、科研報告書)。

(33) 『埼玉県教育史』第四巻(一九七一)に引く「県議会議史」の記事より。

(34) 小山博也「歴代知事―人と業績―その一二 第一二代 木下周一」『埼玉県史研究』二四、一九八九)より。

(35) この事件の評価について、前掲注34小山論文は、「甘い顔をしてきたため生徒を増長させた。断固たる措置を執るべきだ」という趣旨の意見と、学校当局が「騒動ある毎に生徒を厳罰して之を鎮圧し徳望無きの職員として依然職に在らしむ」ことを問題視する、学校側、ひいては知事の対応を批判するものがあつたことを紹介している。また、この事件に関する一次資料として、埼玉大学教育学部所蔵の「明治三十八年二月生徒停学事件ニ関スル書類」というものがある(前掲注24の「歴史的資料基礎作業」には含まれていないが、埼玉大学教育学部蔵)。その中の「生徒懲戒始末書」(伊藤学校長)は、事件の発生から生徒六名の退学に至るまでを時系列で記したものである。それによると、生徒からの願い出を最初に受けた舎監は、赴任して三年目の有元久五郎だった。有元は同僚教師等と生徒の説得あたるが受け入れられず、事態が大事になることを防ぐことができなかった。その有元は昭和になって学校長として埼玉師範に再登場し、創立六十周年記念事業と「鳳翔記光碑」の建立を行う。有元の心中には、明治三十八年の

挫折があり、それを拭って埼玉師範の栄光を取り戻したいという思いがあつたのではなからうか。この点は次稿で述べる。

(36) 前掲注3。

以上

#### 謝辞

本稿作成にあたり、武豊町歴史民俗資料館、鹿島恒勇氏、埼玉県立熊谷図書館、埼玉県立文書館、さいたま市浦和博物館、さいたま市立図書館、埼玉大学教育学部より資料提供や情報提供などを受けた。ここに記して御礼としたい。

(二〇一三年三月三十一日 提出)  
(二〇一三年五月七日 受理)